

要 約

ハンセン病に関する薬学的キリスト教文化研究

野 田 康 弘

重い皮膚病とハンセン病

旧約聖書のレビ記には「重い皮膚病」についての規定が記述されている。聖書の重い皮膚病は、かつて「らい病」と訳されており、ハンセン病に対する偏見を助長する要因となっていた。ハンセン病は世界各地で認められ、ドイツハンセン病博物館の資料によれば、ジュリアス・シーザー、ナポレオン・ボナパルト、フォードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキー、ウラジーミル・イリイチ・レーニン、これら北ヨーロッパの歴史上の人物もハンセン病に苦しんだとされている。ハンセン病の原因菌は、らい菌 *Mycobacterium leprae* であり、1873年2月28日、アルマウェル・ハンセンによって発見された。その9年後にロベルト・コッホが結核菌 *Mycobacterium tuberculosis* の発見に至る。結核菌はらい菌と同様、グラム陰性桿菌に属する。この2つの細菌は形態が似ており、らい病と結核は、共に不治の病であることを確証させた可能性がある。ハンセン病が疑われると、感染の拡大を予防する目的で隔離された。治療法は20世紀に確立

* 金城学院大学薬学部准教授

され、らい菌の感染力が弱いことも証明された。しかし隔離と差別の歴史は続いた。『石館守三伝』(蝦名賢造著)には「青森市の郊外6キロほどの新城村に、東北保養園と称した病院がある。そこに、1、2度薬を届ける機会があったのである。(中略)そこへ行くと、いまだ見たことのない、異様な患者が入院している。鼻はない、指がない、手が動かないという奇形の患者である。これがハンセン病(らい患者)であった。」と書かれており、身体に変形があるという理由で隔離されていたことがうかがえる。

旧約聖書中の重い皮膚病への対応 レビ記 13, 14章

旧約聖書の時代、祭司が重い皮膚病を診断し、レビ記13, 14章の規定に基づいて隔離を行っていた。皮膚に雪のような白い粉状のものが現れると「ツアラート」すなわち重い皮膚病が疑われ、祭司の観察下に置かれた。症状が皮膚全体に広がっていくと重い皮膚病として診断され、症状がある限り隔離された。さらに、この重い皮膚病がただれて肉芽組織を露出するようになると「慢性の皮膚病」に移行する。この慢性の皮膚病は白くなって治ると記載されている。ハンセン病において皮膚の色素が白くなることはあるが、雪が積もったように白くなることはない。ただれて肉芽組織を露出することも多くはない。むしろ、ハンセン病は末梢神経障害に伴う知覚麻痺により顔面や四肢に外傷を受けやすくなる。この外傷により顔面や四肢が変形し障害が残るという特徴がある。レビ記13, 14章の規定には障害のある者は重い皮膚病に当たるとは記載されていない。

旧約聖書中の障害者への対応 レビ記21章

レビ記21章の中に、障害のある者は「神に食物をささげる務めをしてはならない」という記述はある。しかし、障害のある者を隔離せよとは記

されていない。そもそも顔面や四肢の変形は、重い皮膚病の症状には該当しないので、隔離する必要はなかったはずである。

まとめ

皮膚疾患の鑑別は、現代の皮膚科学においても難しく、正確な診断には経験を有する。新約聖書に登場するラザロには全身にできものがあったが、社会から排除されて生活していた。「できもの」も重い皮膚病と同様な扱いを受けていたことが示唆される。皮膚病の鑑別は難しい上に、レビ記の規定は複雑である。

顔や四肢に障害を生じさせるハンセン病に対して、皮膚症状を重視して誤ってレビ記13、14章の規定をあてはめ、重い皮膚病と同様に扱ったことが示唆される。聖書の翻訳の不確かさがハンセン病差別を助長する要因となっていること指示する報告もある。しかし、聖書の読者がレビ記21章に記述されている規定に従って判断していれば、むしろハンセン病患者を隔離と偏見から早期に解放することができたのではないかと考えられる。